GOKURAKUJI DAYORI
極楽寺だより
2022(令和4)年 3月号

発行所：極楽寺（浄土真宗本願寺派）〒759-3803 山口県長門市三隅下野波瀬3633 ☎0837-43-0625

春の彼岸会法要　中止のご案内

三月三・四日勤修予定

コロナ禍は、年末年始にかけて一息ついたと思っていたのですが、新種のオミクロン株による感染が、山口県においても一気に広がってしまいました。

オミクロン株は「感染力は強いが重症化の可能性は少ない」という指摘もありますが、油断はできません。その為、今回の『春の彼岸会法要』も、残念ながら中止とさせていただきます。

いつになれば、収束するのでしょうか。うんざりする気持ちもありますが、一日一日を丁寧に歩んでいくしかありません。どんな一日も、私の人生にとってはかけがえのない一日なのですから。

残念ながら、
今回の法座も中止といたします。

本堂の阿弥陀さまを、ライトアップしました

昨年末に勤めました御正忌から、本堂の阿弥陀様が光輝くように、ライトアップしました。なぜ、ライトアップしたのか。その思いについて、ご説明させていただこうとおもいます。

以前テレビを見ていたら、夜トイレに行くのが恐ろしいという小学生の女の子を、何とかしようという企画がありました。彼女は、暗いから怖いというだけではなく、「お仏壇のある部屋の前を通らなくては、トイレに行けないのが嫌だ」と。つまりお仏壇が恐ろしいというのです。確かに、お仏壇は死を連想させますから気持ちはわからなくはないのですが、今の時代を象徴しているようで寂しい思いがしました。

でも昔は、生活の中に金色や赤色、電球というものはありませんでしたから、家の中で一番明るい場所というのは…、実はお仏壇だったのです。

金子みすゞさんの「お仏壇」という詩には、

「朝と晩とにおばあさま、
いつもお燈明あげるのよ。
なかはすつかり黄金だから、
御殿のやうに、かがやくの」

とあります。昔の人は、お仏壇を中心に、お仏壇の光に照らされて生きておられたのです。ところが近頃は、自分を中心に、自分を輝かせようという時代ですから、生活が明るくなるほどに、照らしてくださるお仏壇の光が見えなくなり、気がつけば家の中で一番暗く、恐ろしい場所になってしまいました。

しかし、照らされるという経験は、実は大切なことなのです。照らされるからこそ、自分の影（陰）が見えて↖

Gokurakuji-News

くる。陰とは、「陽の当たらぬ場所」「見えない部分」「表面に出ない部分」のこと。それは、私が気づかない部分であり、同時に目を背けてきた弱い部分、愚かな部分でもあります。でも、陰を抱えていることを知らされるからこそ、それでも生かされ、許され、支えられているという「お陰さま」の世界との出遇いが開かれるのです。

昔の人たちは、「陰」という字に、わざわざ「お」と「さま」という尊敬の言葉をつけられました。それは、私の目には見えない「陰の世界」があることに気づかれたからでしょう。その世界が私を包み、支え、生かしていてくださることに、目覚められたからなのです。

他にも「お疲れさま」「ご苦労さま」「ご馳走さま」と↘

いう言葉がありますよね。あなたの「疲れ」や「苦労」によって、この私が生かされている。たくさんの方々が走り回って（馳走）くださったことで、ご飯をいただくことができた。そんな目には見えない世界のはたらきに、敬いの心で「お」と「さま」をつける。こういう世界に対する敬意は、照らされる経験がなければ、わからないのではないかと思うのです。

照らされてこそ、初めて見えてくる世界があり、自分を輝かせようとするほどに、見えなくなることがあるのです。現代社会に生きる私たちは、照らされる中で自分を振り返ることを、忘れているのではないでしょうか。

阿弥陀様に手を合わせ、その光に照らされて、我が身を振り返る。その営みこそが、私の人生をより豊かなものにし、目には見えない世界との出遇いを開いてくださるのです。光輝く阿弥陀様を仰ぎながら、味わいたいものです。■

ギョーカイ
ヨーゴ
お寺の
業界用語

日頃耳慣れない、お寺で使われる言葉をご紹介する、『お寺の業界用語』。ぜひとも覚えて、お寺に親しんでいただけたらと思います。

三具足（みつぐそく）・五具足（ごぐそく）

お仏壇のお飾りの、お花・香炉・ロウソク立てのセットのことです。

◇ 日常は、下図のような形となります。これを三具足と言います。

◇ 法事やお取越しなどの際には、下図のように飾ります。これを五具足と言います。

普段は、三具足。法事やお取越しなどの行事の時には、五具足とおぼえてください。

但し、お仏壇の大きさや、それぞれの事情によって、三具足のみでも構いません。

物でお布施

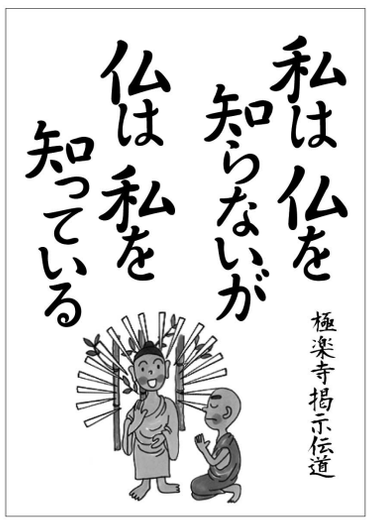
家庭で眠っている物を、周りの人のために、活かしませんか。
下記の物があれば、お寺までお持ちください。

書き損じはがき・未使用切手・商品券・未使用テレフォンカード・
ビール券など金券・CD・DVD・ゲームソフト・ゲーム機器

プルトップも、
引き続き集めています！

月々の言葉

Monthly Words



2月の言葉

日本の伝説的なロックバンドといえば、ザ・ブルーハーツを挙げる人が多いのではないかと思います。一九八〇年代後半から九〇年代前半にかけて活躍し、「リンダリンダ」「TRAIN-TRAIN」「人にやさしく」といった名曲は、耳にすれば誰もが「聞いたことがある！」と言われるはず。それほど、大きな影響力を持ったバンドでした。

そのザ・ブルーハーツのボーカルで、中心人物だった甲本ヒロトさんがTVのトーク番組に出演し、こんなことを言っておられました。

「同じ世界に生きているから、同じものを見ているはずなんですね。同じものを聴いているんですよ。でもね。面白いもので、同じところにいて同じ方向を向いているか↘

Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words

ら、同じものが見えているとは限らなくて、それはどういうことかというと、ピントが合っている場所が違うんです」（フジテレビ『まつもtoなかい』）。

これは、ヒロトさんがロックとの出遇いについて語られたものなのですが、私たちのものの見方についての本質を表している言葉だと思いました。同じ方向を向いていても、同じものを見ているとは限らない。どこにピントが合っているかで違う景色に見えるし、人によっては見えないものもある。確かに、そうだと思います。

そう考えると近頃は、経済合理性や生産性ばかりにピントを合わせる社会になったように思えます。お金や損得、役に立つか立たないか。そこばかりにピントを合わせていたら、見えないものも出てくるのではないでしょうか。

甲本ヒロト

読売新聞に、『子どもの詩』というコーナーがあります。五十年以上も前から続く名物コーナーで、全国の中学生以下を対象に応募された、子どもならではの新鮮な視点の↖

詩が、数多く掲載されています。その中で、私のお気に入りを紹介したいと思います。

まず一つ目は、茨城県の小学六年生・伊藤直人くんの『田舎』という作品です。

「ぼくの家の周りは　畑と森と　自動販売機しかない
　他に何もないところが　豊かなところだと思う」

（『こどもの詩』50周年精選集）

凄いと思いませんか。経済合理性や生産性に合わせたピントでは「何もない」としか見えない景色が、伊藤くんには「豊かなところ」に見える。たくさんのものが、色んなものが、彼には見えている。こんなピントの合わせ方を、私たちは学ぶべきではないでしょうか。

二つ目は、一九九五年に起こった阪神淡路大震災の後に、神奈川県の小学二年生・村田佳奈恵さんが書いた『がれき』という作品です。

「神戸の大震災のニュースで
　がれきという言葉を知った
　がれきは
「あっても何の役にも立たな
　いもののたとえ」↘

Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words

と辞書にのっていた
　でも神戸のは　がれきじゃない　ぜったいちがう
　神戸の町にあるのは
　一人一人の大切な　こわれてしまった宝物なんだ」

（『こどもの詩』50周年精選集
　読みやすいように、一部漢字に変えています）

同じものを見ても、人によって、立場によって、大切にしているものによって、違って見える。ゴミに見える人もいれば、思い出の詰まった宝物に見える人もいる。自分のピントに合ったものが、世界のすべてではないのです。

親鸞聖人が書かれた『唯信鈔文意』という書物に、「れふし・あき人、さまざまのものは、いし・かはら・つぶて」という言葉が出てきます。「いし・かはら・つぶて」とは、まさに「がれき」と同じ意味、「あっても何の役にも立たないもののたとえ」です。当時では、猟師や漁師、商人といった人たちは、社会的に蔑まれていた存在でした。いや、仏教の救いからも排除された存在だったと言えるでしょう。親鸞聖人はそんな立場の人たちと、「いし・かはら・つぶてのことくなるわれらなり」と、共に生き、↖

共に救われていく道を求められました。そして「かはら・つぶてを、こがねとなさしめんがごとし」、がれきのように扱われている人々を、黄金のように輝かせてくださる阿弥陀如来のはたらきと出遇われたのです。

社会的には「あっても何の役にも立たないもの」のようにしか見えない「われら」が、阿弥陀様から見れば黄金のように輝く「宝物」だと知らされた。その喜びと感動が、伝わってくるような言葉です。

こんなピントの合わせ方を知らされたら、自分が見ているものが世界のすべてだとは言えなくなります。自分が知っている、分かっていると決めつけていることが、いかに傲慢なことかを教えられるでしょう。

仏様の智慧を「如実知見」と言います。そのものを、ありのままに見るということです。しかし私たちには、ありのままにものを見ることはできません。それぞれのピントが合ったものしか見えないのが、私たちなのです。↘

最後に、『子どもの詩』からではありませんが、こんな詩をご紹介したいと思います。

「闇の夜の　月の光のありがたさは　わかるけど
太陽の光は　大きすぎて　わからない
雨の日の　傘のありがたさは　わかるけど
屋根のご恩は　大きすぎて　わからない」

これは、誰が書かれたかわからないのですが（ご存知の方がおられたら、ぜひ教えてください）、今回のテーマを締めくくるには、相応しい詩だと思います。

足元のおぼつかない闇夜に、月の光が差し込むとホッとします。雨の日に、傘があると「良かった」と思います。しかし、昼間に太陽の光があるのは当り前。屋根の下では、雨風がしのげるのは当然だと、ついつい思ってしまいます。私たちのピントは、近くのものには合いやすいのですが、大きすぎるものには合いにくい。直接的なはたらきに恩は感じても、大きすぎる恩に気づくことは難しい。でも、私が気づいていないだけで、無いわけではありません。

仏様のはたらきは、私の目には見えません。だからといって、「ない」と決めつけるわけにはいかないのでしょう。↖

なぜなら、仏様のはたらきに気づいた人、ピントが合った人がいるからです。いや正確には、阿弥陀様がこの私にピントを合わせ、はたらきかけてくださっている。その心に気づかれた方がおられたからです。

「私には、見えていないものがある」という姿を知らされ、謙虚な学びの姿勢を持つ。そのことが、この私に豊かな世界との出遇いを開かせてくださるのだと、教えられるのです。■

※　今回は、ピントという視覚的な譬えを使いました。しかし、これはあくまでも譬えあり、視覚に障害を持つ方には、また別の見え方があります。それについては、『目の見えない人は世界をどう見ているのか』（伊藤亜紗　光文社新書）を、ぜひ読んでいただきたいのです。世界が広がり、豊かに見えてきます。

極楽寺だより を送りませんか

都会に出ておられる子どもさん、お孫さんたちへ。有縁の方々へ。お寺へお申し出ください。直接郵送します。

Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words ~ Monthly Words

3月の言葉

この言葉は、飲食店についての情報をインターネットに掲載するグルメサイト『ぐるなび』が、二〇一五年に出した新聞広告のキャッチコピーです。そこには、こんな文章が添えられていました。

「思えばあの人も。ほんの数年前までは名前も知らない他人だったのに。まさかこんなに仲良くなるなんて不思議だ。尊敬したり、嫉妬したり、迷惑かけたりかけられたり。出会いは私にいろんなことを教えてくれる。そしてそういう経験が今の私をつくっている。あなたがいない自分は自分じゃない。そう思わせてくれてありがとう。いつか私も誰かの一部になれるだろうか。さあ乾杯しよう。その一杯は人と人とをつないでくれる」

出会いの不思議さ、大切さを味わうことができる文章↖

です。まあ広告だけに、「さあ乾杯しよう。その一杯は人と人とをつないでくれる」という最後の一文に、「その乾杯する店は『ぐるなび』で検索してね」という思いが込められていることも、伝わってくるのですが…。

出会いは、人を育てます。いや、私たちの人生は、出会いによって成り立っていると言っても良いのでしょう。出会いによって新たな気づきが生まれ、自分の考えの小ささや、世界の豊かさを教えられます。逆に傷つき、苦しみ、辛い思いをする出会いもありますが、その苦悩の中で見えてくるものもあるでしょう。私たちの人生は、まさに出会いによる経験で、つくられているのです。

しかし、その出会いを、私たちはどれだけ自覚しているのでしょうか。人生を振り返り、「あの時、あの人に会ったからこそ」と気づけた時、改めて出会いによって育てられていたことを知らされる。そして、「あなたがいない自分は自分じゃない。そう思わせてくれてありがとう」と言える、そんな出会いがある人生は、とても素敵なものだと思います。↘

私はこの広告に添えられた文章を読んで、遠藤周作の『深い河』という小説の一節を思い出しました。

登場人物の一人である磯部は、妻を亡くした悲しみの中で、インドへ向かいます。ガンジス河の前に立つ彼は、ある一つの思いに突き当たりました。

「一人ぼっちになった今、磯部は生活と人生とが根本的に違うことがやっとわかってきた。そして自分には生活のために交わった他人は多かったが、人生のなかで本当にふれあった人間はたった二人、母親と妻しかいなかったことを認めざるをえなかった」

（『深い河』遠藤周作）

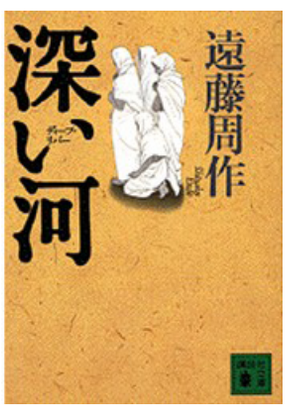
「生活」を生きることと「人生」を生きることは、根本的に違う。その通りだと思います。では、どう違うのか。

「生活」を生きる中での交わりとは、自分を中心にしたもの。極端に言えば、自分の思いを満たすための道具や手段として相手を見ていく関係、「役に立つか立たないか」で判断した、利用するための関係だと言えるのではないでしょうか。

それに対して、「人生」を生きる上でのふれあいとは、「生活の中に、フッと穴を開けてくれる」（『ほんとうの私を求めて』↖

遠藤周作）ような、その出会いによって自分自身が変えられていくようなものなのでしょう。それまでの枠組みが揺さぶられ、新しいものの見方が開かれ、思いもよらなかった自分に育てられていく。まさに、「あなたがいない自分は自分じゃない」と言える出会いだと言えるでしょう。

私たちは共に「生活」をしていても、「人生」の中で出会っているとは限らないのです。自分の思いで相手を決めつけている間は、顔を突き合わせても、すれ違っているだけなのかもしれません。



これは、仏様との出遇いにも通じます。仏様を私の願いをかなえる為の道具としたり、仏法を学ぶことで名利を得ようとする限り、出遇いが開かれることはありません。仏法を通して、都合を優先してきた自分の姿を知らされる。枠組みが揺さぶられ、新たな世界に気づかされる。それが仏様との出遇いなのだと教えられるのです。

但しそれは、劇的な体験という形もあれば、静かに少しずつ育てられるケースもあります。また、直接出会って↘

いなくとも、その方の言葉に導かれ、人生が変わるのであれば、それも出遇いと言っても良いのだと思います。なぜなら私も、親鸞聖人や先人の言葉によって育てられた一人だからです。

二〇一六年、神奈川県相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」で、十九人が殺されるという痛ましい事件が起きました。事件を起こした植松聖被告の手紙には「障害者は不幸を作ることしかできません」と書かれ、そして事件を受けてインターネットには、「よくやった！」と同調する意見が、数多く書き込まれました。

通常の事件報道と違い、被害者やその家族が憤りを表明できないまま、加害者側の言葉だけが盛んに報じられていきます。メディアが憎悪を拡散させることにしかなっていない中、ジャーナリストの神戸金史さんがFacebookに投稿した、重度の自閉症を持つ長男へ書いた詩『障害を持つ息子へ』が、大きな話題となりました。抜粋して、ここにご紹介します。

「私は、思うのです。

長男が、もし障害をもっていなければ／↖

私たちはもっと楽に暮らしていけたかもしれないと。
何度も夢を見ました。
「お父さん、朝だよ、起きてよ」
長男が私を揺り起こしに来るのです。／そして
目が覚めると、いつもの通りの朝なのです。／
ああ。またこんな夢を見てしまった。ああ。ごめんね。
幼い次男は、「お兄ちゃんはしゃべれないんだよ」と
言います。
いずれ「お前の兄ちゃんは馬鹿だ」と言われ、泣くん
だろう。
想像すると、私は朝食が喉を通らなくなります。
そんな朝を何度も過ごして、突然気が付いたのです。
弟よ、お前は人にいじめられるかもしれないが、
人をいじめる人にはならないだろう。
生まれた時から、障害のある兄ちゃんがいた。
お前の人格は、この兄ちゃんがいた環境で形作られた
のだ。お前は優しい、いい男に育つだろう。／
あなたが生まれたことで、私たち夫婦は悩み考え、
それまでとは違う人生を生きてきた。↘

親である私たちでさえ、あなたが生まれなかったら、
今の私たちではないのだね。／
あなたが生まれてきてくれてよかった。
私はそう思っている。
父より」（神戸金史　この詩はFacebookから、のちに
書籍『障害を持つ息子へ』に所収されました）

「あなたがいない自分は
自分じゃない」と言い切れ
る、そんな人生の出会いが
ここにある。「役に立つか
立たないか」では、理解で
きない豊かさがある。この
詩を読んで、私は圧倒されました。自分の人生の受け止め
方が、いかに貧しいかを突きつけられたような思いがしま
した。

どうやら、人生を振り返り、よくよく見直す必要がある
ようです。「あなたがいなければ、私は私ではなかった」
と思える人が増えるほど、人生が輝いて見えてくるのです
から。■（次ページへ続く）↖

（前ページより続く）

※　今回の文章では、「出会い」と「出遇い」という表記を使い分けています。「あう」にも色々な漢字が当てられ、それぞれに意味が違うのです。

「会」は、知人に会う、人と会うということ。

「逢」は、男女があうこと。

「遭」は、悪い事にであうこと。

「合」は、川が合流する、話が合う、息が合うなど、二つ以上のものが一つになる。よく調和すること。

このように「あう」にも様々ありますが、親鸞聖人は「値遇」という言葉を使われています。「遇」とは「たまたま、あう」ということで、「値」は、人と直面する、「寸分狂いなく、ピタッと合わさる」ということ（商売の「値段」は、ここから来ています）。そして「値遇」とは、阿弥陀様との出遇いを表されています。まさに自分のための教えと出遇ったという喜び。そしてそれは、私から求めたものではなく、「たまたま」としか言えないものだったという親鸞聖人の感動が、この字に込められているのでしょう。その為、人に対しては「出会う」、阿弥陀様や親鸞聖人、仏法を伝えてくださる先輩方には「出遇う」と使い分けて、表記しています。

極楽寺ホームページ

極楽寺.comで検索を

レイアウトをリニューアルしました

古い仏具 使わないお線香
お寺へお持ちください　本堂に回収箱を設置してあります。

住職のつぶやき

Jyuusyoku's Tweet

❑【おそれる】という言葉は、漢字で【恐れる】【怖れる】【畏れる】等と表記されます。【恐れる】は「こわがる」「心配する」ということで、【怖れる】は「おじける」「びくびくする」の意味で使われます。それに対して【畏れる】は、「おそれ敬う」「おそれはばかる」という意味になります。❑【恐れ】や【怖れ】が広がると、不安が煽られ、差別やヒステリックな行動につながる。それを新型コロナの感染拡大の中で、私たちは目の当たりにしました。そして今度は、新種のオミクロン株による感染が拡がっています。新種は重症化する危険性が低いともいわれていますが、軽視するのは如何なものかと思います。専門家でも、わからないことが多いのですから。未知のものへの【畏れ】を失う時、人は傲慢になるのです。❑生物学者の五箇公一さんは、「元々ウィルスは野生動物の中にいて、常に変異を繰り返している。たまたまヒト型が生み出されても、動物の中で自然と淘汰されていく。そこに人間が近づくことで、ウィルスは新しい住処を得ることになる。そもそも今回の感染も、人間が自然に踏み込み過ぎて、関係が崩れたことによるのではないか。本来の住処と取り分をわきまえ、かつての緊張関係を取り戻さなくては、また同じことが繰り返される」と指摘しておられます。❑まさに自然に対する【畏れ】を失い、敬いを失ったことで傲慢になっている現代社会を言い当てられたようで考えさせられました。またそれは、宗教的なものへの【畏れ】を見失ったことも背景にあるのではないか。そんなことも思っています。（住職）

次回法座の予定　春の永代経法要 4月18日（月）19日（火）

御講師 名護屋宗味 師（山口市正善寺住職）